

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アーミッシュを訪ねて 2：信仰と家族・コミュニティ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5805

信仰と家族・コミュニティ

鈴木七美

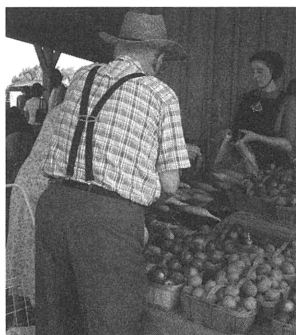
(すずき ななみ)

● 迫害の中で形成された宗教的規律

アーミッシュをめぐる様々な宗教的きまりであるオルドゥニング (Ordnung) は、主として神学的理解に基づき、また迫害の歴史の記憶によって形づくられてきた。再洗礼派の人々は、信仰を確信した成人のみが洗礼を受けるべきだと主張し、一五二五年に秘密の集会で互いに洗礼があった。幼児洗礼の否定は、幼時に死亡した者は天国への道を閉ざされるという怖れを人々に抱かせ、再洗礼派は激しい迫害に遭う。その様子は、千ページ以上に及ぶ『殉教者の

鏡』(Martyns Mirror, 1685) に描かれ、迫害の記憶はアーミッシュの賛美歌集『アウスブント』(Ausbund) にも刻まれている。キリスト教がヨーロッパを覆うにしたがつて幼児洗礼は重要視され、生きて生まれる望みがない子どもに胎内で洗礼する器具まで考案された。幼児洗礼重視とあいまって子殺しの罪は重くなり、子供の生死に関わり「賢い女 sage femme」と呼ばれてきた産婆は中世以降しばしば魔女狩りの対象にもなった。再洗礼派の主張は、魂の行方に関し問題を提起するものだったのだ。

迫害に対し人々は無抵抗の姿勢で殉教していった。それ



フルーツを売るオールドオーダー・メノナイトの女性

は再洗礼派に現世に対する絶望と神の国出現への希望を抱かせ千年王国運動の様相を呈した例もある。一六世紀のミューンスター再洗礼派王国では、財産共有制（共同食堂、貨幣ではなく現物支給、貴金属・生活物資の供出）が試みられた。アメリカに渡った再洗礼派のなかにも、財産を共有するハタライトのような宗派もある。アーミッシュは家族を基本としたコミュニティに生きる道を選んだのである。

●生活規範としてのオルドゥヌングとその変容

再洗礼派が日々の生活のなかで具体的に信仰を表現する方法が、オルドゥヌングの遵守である。初期再洗礼派の神学的理解（五三）は、新訳聖書に基づくキリストの教えへの恭順、信者の洗礼、契約的なコミュニティとしての教会の信認、悪徳の世界からの社会的分離、逸脱した者の宗派からの排除、暴力拒否と無抵抗、宣誓拒否、華美への反対と清貧の順守、神や人を偶像として表現し祈ることの拒否などである。ヤコブ・アマンは、顎鬚を剃ることを否定し（ただし、口髭は戦争や暴力を象徴するとされて剃った）、ドレスのボタンを華美だと非難した。現在もメノナイトは「ボタンの人々」、アーミッシュは「かぎホックの人々」と

呼ばれることもある。成文化されたものではないが、オルドゥヌングはアーミッシュの人々の生活においてガイドラインの役割を果たしている。写真、装飾品、化粧、離婚、教育、起訴、軍事関連職、電気、動力、通信用機材、服装、バギー、言葉、礼拝、礼拝後の食事などに関するきまりが知られている。ランカスターにはアーミッシュの生活に関する博物館「アーミッシュ・ファーム・アンド・ハウス」があるが、窓には緑のロール・スクリーンがつけられている。緑色は平和と非暴力の象徴だという。写真を撮られることには抵抗があるようで、オルドオーダー・アーミッシュのサムさんも、オルドオーダー・メノナイトのベンさんも、撮影を許さなかった。

とはいえオルドゥヌングの適用には個人差もあり、変容を蒙りつつある。二〇〇二年の研修で訪れたカナダ、オンタリオ州のキッチナー、セント・ジェイコブス周辺に集住するオルドオーダー・メノナイトは、ペンシルヴェニアのメノナイトやアーミッシュを墮落していると批判し一九世紀に移住してきた。オンタリオには二八、七〇〇人のメノナイトなど再洗礼派が暮らす、うちオルドオーダー・アーミ

ツシュ八〇〇人ほどである（一九九年）。最古のメノナイトの家「ジョゼフ・シュナイダー・ハウス」は、当時の生活を再現したミュージアムとして公開されている。ペンシルヴェニアのアーミツシュより厳格だというこの地のメノナイトはボタンでなくてピンを用いていたというが、使用理由は授乳しやすいという実用的なものであり、「華美」としてオルドゥヌングに加えられたのは、一九世紀末のことではないかと説明された。

キッチンナーの北のセント・ジェイコブスやエルマイラではバギーが行き交い、フアーマーズ・マーケットにもバギー用の駐車場が用意されている。マーケットでは、ドイツ系の人々が好んだという豚の尻尾の料理が提供されている。サマー・ソーセージ売場ではオルドオーダー・メノナイトの老人が、ソーセージは撮ってもよいが自分の姿は決して入れないようにと注意していた。他方、フルーツを売る若い女性たちは仕事をしている姿ならかまわないと撮影に応じてくれた。エルマイラのオルドオーダー・メノナイトの家では、絨毯を敷き詰めてはならないという贅沢を戒めるオルドゥヌングに従い、小さな絨毯がこぢんまりと敷かれていた。それらは丁寧手作りされた美しい色あ

いのものである。

オルドゥヌングを意識しながら美しいものを編み出すという態度は、ハーブや野菜の配置に凝った家の前庭にも表れている。家々の白い壁と窓や庭を飾る緑は、彼らの住処に統一感を与え景色全体が信念を表現している。ランカスターのサムさんが、我々は伝道しないが暮らし方そのものが伝道だと語ったことが思い出された。

習慣や「伝統」は必ずしも古くから継承されたものとは限らず各々のグループの考え方を表明する役割を担うため、オルドゥヌングは年二回開かれる聖餐式前の会合で確認され修正される。オルドゥヌングの変更を検討する際に重要な点は、外の世界からもたらされるモノが、人々に「差」や優越感を生じさせないかということだ。ガソリン・エンジンで動くチェーンソーや草刈機、ランニング・シューズ、バーベキュー・グリルは受け入れられた。今までも使われてきたものと大差ないとみられるものは問題がない。だが、あまりにも多くの変化を性急に求める者は、「柵を飛び越える人」と呼ばれる。ビデオカメラやビデオカセット・レコーダーは、テレビやパソコンと同様、長期的に見て外界との関係性を変容させる可能性があると禁止

されている。

●豊かさの尺度と家族・コミュニティ

アーミッシュの人々の多くは銀行預金口座を開いているが、農場から得られる収入は、アーミッシュでない農夫の人々の平均収入より少ないといわれる。アーミッシュは、世俗的な影響を受けずに家族を支えるものを自分で生み出すことを重視しており、それは神への感謝と贖罪を表現することでもある。土地を所有し、勤勉に忙しく働き、慎ましく誠実であることに価値が認められている。財産は個人所有だが、共有すること、助け合いや友愛が強調され、裕福、消費競争、高い社会的地位など差をもたらすものを避けようとしている。皆が集まって納屋を立ち上げる「バーン・レイジング」は、アーミッシュの協同の象徴としてしばしばとりあげられる。一般の保険会社が販売する保険にほとんど加入しないアーミッシュは、木造の納屋が火災に見舞われると手を貸し合い納屋を再建する。二〇〇〇年の研修でランカスターに到着した日も納屋が燃えた直後で、男たちが幾分悲しげに霧の中で忙しく立ち働いていた。資材の購入資金は、「アーミッシュ扶助協会」などが管理す

る共通の貯金箱から支払われる。

互いに助け合い数世代にわたる家族で子供を育てることや、高齢者を見ることは重視されている。アーミッシュは大家族だ。ランカスターのローズの友人は、昨年の一月に四三歳で一七番目の子供を出産した。ローズの祖母は一人の子供をもうけ、ローズの母は末子である。現在ランカスターのアーミッシュの平均子供数は八人で、アメリカの平均の三から四倍であるという。アーミッシュの家族の一五%が一〇人以上の子供をもつ。子供をアーミッシュの立派な農夫に育てあげることによって夫婦は尊敬を得る。子供夫婦が農場を継ぐと、親たちはキッチン、リヴィング・ルームを備えた隣接の「おじいちゃんの家」(Grand-daddy house)に移る。老親が高齢者のための施設に入所することはほとんどない。長男以外の子供たちはいずれ家庭をもち別に家を構えるが、遠く離れるわけではない。

家族を核として構成されるコミュニティにいかに関与するかが信望に繋がる。世俗社会において社会階層と関連する収入や教育程度などはアーミッシュにおいては意味をなさない。従順、謙虚、気づかいこそがアーミッシュに求められるものなのだ。よく手入れされている馬、ゆつたりし

て整理された農場の建物、家の周りの花々、戸棚のなかに整然と並んだ陶器などが成功のシンボルである。こうしてアーミッシュの人々のなかにも成功者は生まれる。

同じ再洗礼派でも財産共有制をとっているハタライトは、北米で特徴的な生活を続けている。エフラータ・クロイスターは清貧のなかで個人の宗教的成就を、また初期モラヴィアンは人々が家族を大事にするとコミュニティを蔑ろにするのではと懸念した。だがアーミッシュにおいては家族が重要である。シャニング（マイドゥングともいわれる）や破門（excommunication）も、まず家族からの排除によって具体的な形をとる。シャニングされた夫は妻や子供たちと同じテーブルで食事できない。食物や住むところはあてがわれるが、家族のために何かをすることはもはや許されない。きまりに違反した者に聖餐式のテーブルにつくことを禁じたメノナイトより厳しいアーミッシュのシャニングは、彼らが大切に思う家族との関係に向けられる。

● ユートピアとしてのアーミッシュ

多様な家族のありかたが模索され実践されており、とき

には家族の崩壊が憂慮されるアメリカ合衆国で、アーミッシュは古き良き時代を彷彿とさせるノスタルジアをかきたてると形容される。だが、アーミッシュの家族のかたちは伝統的な姿を継承しているといえるだろうか。植民地時代アメリカの移民は、故郷の親族と離れ新天地に向かった人々だ。基本的には核家族の形をとり、大地を耕し作物を実らせることに努力した。既婚女性の平均的な妊娠・出産回数は六から八回とされているが、子供は成人するまで育つとは限らなかった。一九世紀の産業化のもとで都市に向かう人々が増加し子供数は減少した。現在アメリカでは家族の形は多様化し、シングルでも生殖補助医療や養子縁組を選択することが可能だ。再婚後も親子の絆を断ち切らず「ステップ・ファミリー」（複合家族）を形成しようとファミリー・メダリオンの儀式に願いを込める人々もいる。

様々な家族のあり方が出現したが、血筋と信念を同じくする人々が協同するコミュニティは、合衆国の歴史においてほとんど実現しなかった。都市化・産業化が著しかった一九世紀には、超絶主義者たちのフルートランズやノイズのオナイダ・コミュニティなどをはじめとして数々のユートピアが構想された。だが、自給自足、大地との関わり、

共有協同などを重視したコミュニティはいずれも長続きしていない。アーミッシュにノスタルジアを感じる人々は、「何処にもない処 nowhere」という意味をもつユートピアが存続する稀な例としてアーミッシュを憧憬しているのではない。千年王国運動ともいえる再洗礼派に始まり、ユートピアを実現したかに見えるアーミッシュは、変動する社会生活のなかで迷う人々の参照項として機能しているの



〈上〉 オールドオーダー・メノナイトの家
 〈下〉 研修中の学生たち

かもしれない。

とはいえアーミッシュの家族も問題を抱えている。カナダ、オンタリオの出版社から『ファミリー・ライフ』という月刊誌が一九六八年から出されている。アーミッシュやプレーン・ピープルと呼ばれる人々に人気のこの雑誌には、子供と暮らしていても癒えない伴侶に先立たれた親の寂しさや、子供夫婦が親たちと暮らす日常の難しさが綴られている。一九九八年には契約数二万三千を超え、南北アメリカのみならず、ヨーロッパ、インド、そして日本からも注文があり、関心が広く共有されていることが窺える。次回も、遙かなユートピアではなく私たちとともに悩み続ける者としてのアーミッシュに関しさらに考えてみたい。

【参考文献】

- Brad, Igou, *The Amish in Their Own Words*, Herald Press, 1999.
 Denlinger, A., *Real People*, Herald Press, 1993.
 Hostetter, J.A., *Amish Life*, Herald Press, 1983.
 池田智「アメリカ・アーミッシュの人びと」明石書店、一九九九年
 C・A・コルネリウス編『千年王国の惨劇』平凡社、二〇〇三年
 鈴木七美「アメリカの女性 自己実現のフアンタジー」綾部恒雄編『女の民族誌2』弘文堂、一九九六年
 鈴木七美『癒しの歴史人類学』世界思想社、二〇〇三年

(京都文教大学／歴史人類学・医療人類学・北米文化学)